

3-4 性的アイデンティティ

援助交際によって不特定の男性女性が性的な関係を持つことは、自己の性とはどういうものか、異性とはどういうものかを知りたいと思うか思わないかにかかわらず、必然的に当事者に伝達し、当事者は自己の性的位置を学習することになる。私たちが社会的諸関係の中で自己の社会的位置を知るように、性的な諸関係を通して自己の性的な位置を知るのである。先ほども登場したマキは援助交際を通して男性の性というものを知ったと話す。また離婚経験のある25歳のOLのアイは援助交際を行うまで、結婚した一人の男性以外との性行為を経験してなかったが、彼女は援助交際を通して自己の性を認識している。

<データ7> (): 筆者補足

筆者：援助(交際)をやって男性観とか変わったところある？

マキ：男性がいかにか(セックス)しなくては生きていけない人間なのかがわかった

(1997.7.16 収録)

<データ8> (): 筆者補足

アイ：(前略)だからそれで、伝言でエッチ何人か、してみた、自分がどういうのか分かった。(自分の)身体が他の人とは違うっていうのが。

筆者：どう違うの？

アイ：いいみたいなんですよ。

筆者：何が？

アイ：いいみたいなんですよ。だから、私が。

筆者：アソコ(女性器)が？

アイ：うん。だから一回したら(性関係が)なかなか切れへん。何日もしつこく向こうが誘ってきてはるから、だから嫌になって。(相手)をかえてかえてっていう感じやった。

(1998.4.18 収録)

彼女らが援助交際を通じて学習した性に関する知識とは、特定の異性との愛を共有した持続的な性的関係が理想とされる現代社会において知ることが難しいような、性的な事実である。筆者はこの性的事実の学習を彼女らにとって良きことだと考

えている。というのも、自己の性や異性というものを知らないことを想定した場合、現実の性とは全く違った性的な期待や幻想を抱くことも考えられる。そしてこの期待や幻想が現実における性的関係で否定された時に、社会的、心理的ダメージを受ける可能性がありうるだろう。自己の性や異性というものを知ることによって現実に対応できる可能性を考えたときには、たとえ援助交際による性的事実の学習であっても肯定できると思う。

またここで注目したいのは、当人が社会的存在である自我の側面を切り離し脱社会化することで、性的存在の側面を浮き上がらせるということである。性的存在としての自己の肯定は性的アイデンティティの確立につながる。性的アイデンティティを確立することは一種の自己肯定を促す。性的アイデンティティの確立とは、男性あるいは女性が他者とのコミュニケーションを通じて、性的な存在としての自己を認識、確認、承認するである。このことを知るために28才の高校非常勤講師の言葉に見てみよう。

<データ9> (): 筆者補足

筆者：(伝言ダイヤルで男性と会って食事することで)何を満たしているんでしょうね？何かの欲求に答えているんだろうと思うんですけど。

チェ：う～ん、どうなんでしょうね。さっきも気にしてたんですけど、今日化粧の仕方がまづかったかもしれないですけど、私も年より若く見られるんですよ。25,6に見られることって、けっこうあって、だからそういう自分がうれしい、男の人に対してそうやって思われるのが。

(1998.3.20 収録)

テレクラや伝言ダイヤルで男性と会っても性行為はしない、現金はもらわないという援助交際を続けてきているチェは、こちらの問いかけに対して直接には答えずに間接的に答えてくれた。自分の外見が若く見られることに、つまり自分が男性から「若い女性」としてみられ、求められることが率直に「うれしい」のだと。チェの場合、彼女の女性としての性的アイデンティティは男性から若